12. 京都市阿弥陀寺文書調査

若山　阿美

1．概要

阿弥陀寺文書は、京都市上京区寺町通に面する浄土宗寺院である阿弥陀寺に伝来した文書群である。創建は室町時代末期の蓮台野（現在の堀川通今出川以北）とされ、豊臣秀吉による寺町の形成に伴い、現在地に移転した。従来寺宝として公開されてきた中世文書に加え、2024 年 11 月に書院改修工事を開始した際、新たに資料が発見されたため、これらを対象に包括的な調査をおこなっている。

調査日程　2024 年 11 月 4・19・26 日、12 月 3・7・10・12・17・19・24 日、1 月 7・14・16 日、2 月 13・17・21 日

調査参加者　東昇（教員）、渡邊幸奈（博士前期課程）、黒住大輔、渡部凌空（以上 4 回生）、青野要、荒矢悠希、上武恒介、王綾香、岡田いずみ、佐藤裕治、角南博紀、高尾悠冬、竹崎啓貴、田又春哉、長野斗輝、目黒力輝、森壮太、安田健晟、山崎敬幸、若山阿美（以上 2 回生）、呉皓楠（研究生）

2．内容

阿弥陀寺文書は、計 600 点におよぶ文書群であり、創建当時の中世文書、幕末を中心とする近世文書、明治期を中心とする近代文書の 3 つに大別される。中世文書は巻子に仕立てられ、寺宝として伝承されてきた。また、これらの文書の一部については、『京都浄土宗寺院文書』（水野恭一郎・中井真孝編、1980 年、同朋舎）などにおいて翻刻がおこなわれている。今回の調査では、まず新たに発見された近世・近代文書から調査をおこない、一部の翻刻がすでにおこなわれている中世文書については、調査の最後に取り組む方針とした。

今回発見した資料のうち、箱 2 は「役寮」と墨書された木箱に入っており、文書だけではなく、測量図・写真などを含み、総じて 208 点におよんだ。この中で最古のものは元禄 8 年（1695）の「阿弥陀寺境内庵地之儀ニ付」（箱 2-1）である。これは隣接している公義藪（御土居）と阿弥陀寺の敷地との境界線を裏に絵図を描くことで明示したものであり、当時の境内の地理関係を知ることができる。そのほかに確認された近世文書は幕末期が多く、この箱に収められている文書のうち、近代文書が全体の 9 割以上を占めている。これらの文書は主に罫紙に書かれており、寺院運営の中でも特に人事に関する文書が多く確認された。廃仏毀釈による寺院の弱体化を背景として効率的な運営をおこなうため、人事について慎重な審議がおこなわれていたことがわかる。

また、工事の進行に伴って発見された箱３には多数の近世文書が確認された。特に、近世後期における織田家の各藩（芝村藩・柳本藩・柏原藩・天童藩）、織田家の家臣であった森家（赤穂藩）・青木家（麻田藩）との文書の控が家ごとに冊子としてまとめられており、織田家に関しては４冊におよぶ。暑中見舞い・寒中見舞いの品に関する記録、また、阿弥陀寺の住職交代時における先代住職へのねぎらいと新住職への激励が述べられた書状が含まれており、阿弥陀寺と大名家との関係性を解明する上で重要な手掛かりになると考えられる。さらに、箱 3-1 の「阿弥陀寺敷地指図」は永禄 12 年（1569）のものであり、豊臣期に現在地へ移転する以前の阿弥陀寺の寺院規模を具体的に示すものとして貴重な史料であり、今後関連史料を参照しながら検証していきたい。

今後の調査では、近世・近代文書の調査を継続するとともに、中世文書の既存翻刻内容を再検討する予定である。また、点数は限られているものの近世以後に作成されたとみられる版木や、僧侶たちが詠んだと推定される短冊類が発見されたため、これらについても文書調査に引き続いて翻刻などをおこなうことを検討している。また、近世の建立とみられる鐘楼や、近世中期を代表する京都の儒学者である皆川淇園の墓誌の拓本など、文書以外の歴史資料についても調査をおこないたいと考えている。

写真１　目録作業の様子